

大山隠岐国立公園の歴史と文化について解説

大山国立公園は自然の多様性に加え、宗教的・文化的な重要さを持つ地域です。この土地は古代神話の舞台である。八束水臣津野命は島根海岸に立ち、日本海を越えて四つの土地を引き、大山と三瓶山を杭にしてその地を固定させたとされている。それが島根半島となった。

この神話から半島は聖地と見なされており、太陽の女神、天照大御神とその弟、須佐之男命を祀る日御碕神社の存在からそのことが伺われる。東には、大漁と富（商売繁盛）、音楽にご利益のある恵比寿神を祀る美保神社がある。これらの神々によって織りなされた神話と文化の一部分は、史実が記録される以前からこの土地に根付いている。

この土地は神話を作り出しているだけでなく、国立公園の山々という聖地も抱いている。718年に大山寺が建立される以前から大山は山岳信仰の霊場であった。江戸時代（1603年 - 1867年）までに大山寺では仏教徒が地蔵菩薩を祀るようになった。多くの修行僧が行き交う巡礼ルートとなり、国内最大規模の家畜市場への商業ルートとしても発展した。

隠岐諸島もまた、この地域の文化において重要な役割を担ってきた。724年から諸島は朝廷から追放された天皇や公家、役人などの遠流の地となった。後鳥羽天皇（1180年 - 1239年）と後醍醐天皇（1288年 - 1339年）は両者とも流されてから島で数年を過ごされた。島での滞在中、後鳥羽天皇は和歌や刀への情熱を追求し続けた。現在も、彼の遺産として素晴らしい刃と和歌集が残っている。